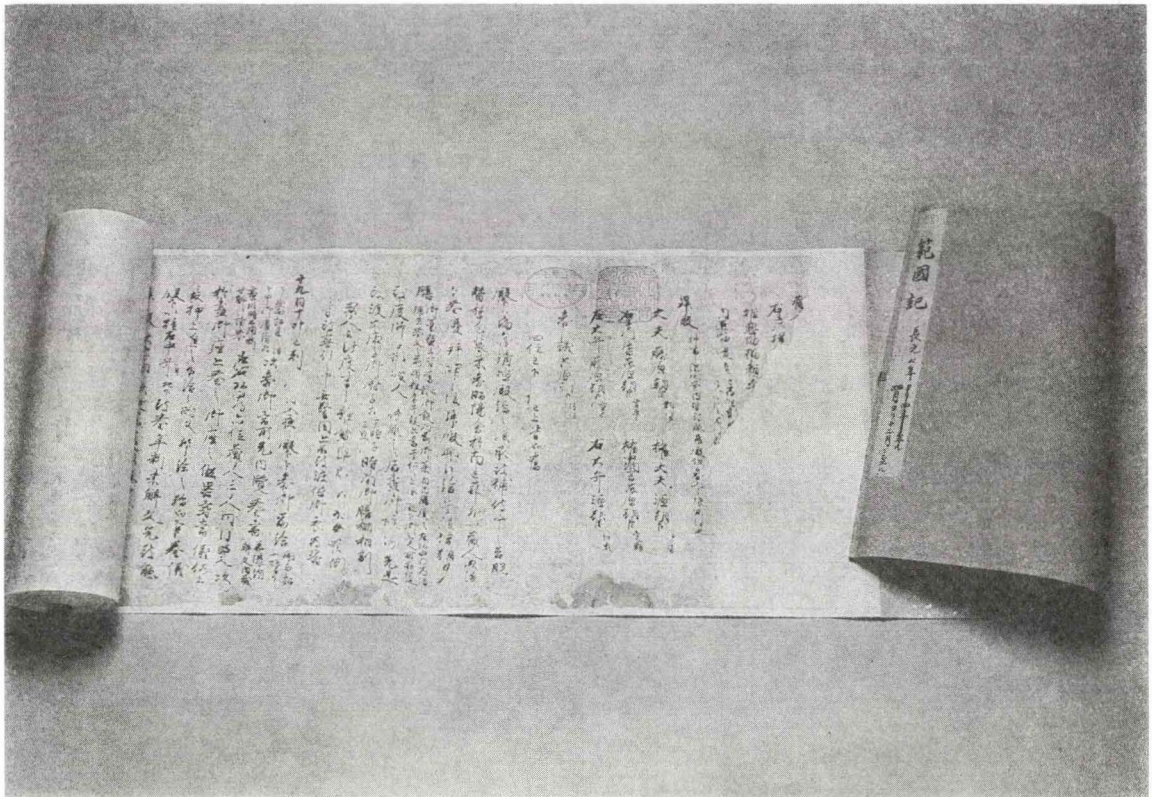


京大広報

No. 398

京都大学広報委員会



範国記（重要文化財） — 関連記事 999 ページ —

目次

<大学の動き>

- ハイデルベルク大学との学術交流…………… 996
- 平成2年度日本語・日本文化研修留学生の
受け入れ…………… 996
- 自衛消防団が京都市自衛消防隊訓練大会に
左京区代表として出場…………… 997

<紹介>

- 60周年をむかえた人文科学研究所と
英語呼称の改正…………… 997

<資料>

- 人事院勧告の取り扱いに関する
国立大学協会の要望書…………… 998
- 附属図書館 平成2年度秋季展示会
「和漢書古典籍のさまざま」の開催…………… 999

<随想>

- トンネル顕微鏡で夢も見える
名誉教授 波多野博行……………1000

〈大学の動き〉

ハイデルベルク大学との学術交流

本学とドイツ連邦共和国のハイデルベルク大学（ルプレヒト・カール大学）の「学術交流に関する一般的覚書」が、平成2年10月11日に交換された。

これは、本学総長が昭和61年10月ハイデルベルク大学創立600周年記念式典に参列した際、並びに昭和62年4月ハイデルベルク大学プトリッツ（Dr. Gisbert Frhr. zu Putlitz）学長が本学を訪問した際に、学術交流について話し合いがあり、同年7月に同学長から書簡により提案があったものである。

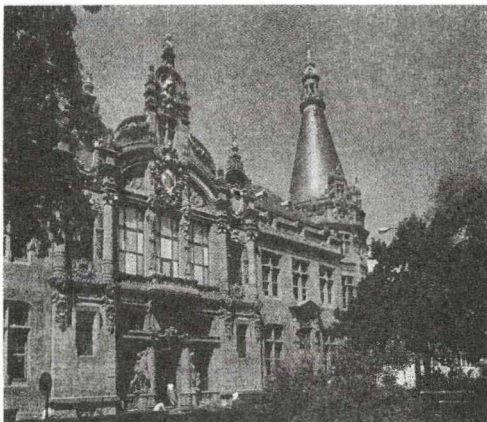
本学ではこれについて検討を進めると同時に、国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No. 363）に沿って同大学と協議を続け、平成元年9月「覚書」を交換することが了承されたものである。

この度、同大学ゼリン（Dr. Volker Sellin）学長が本学を訪問し、総長室において、ハイデルベルク大学との「覚書」が調印された。

ハイデルベルク大学の概要は次のとおりである。

創立：1386 教員数：1,208 学生数：26,861
18学部（神学、法学、基礎医学、理論医学、臨床医学Ⅰ、臨床医学Ⅱ、臨床医学（マンハイム）、哲学・歴史学、東洋・古典学、現代言語学、経済学、社会・行動科学、数学、化学、薬学、物理・天文学、生物学、地球科学）南アジア研究所、ハイデルベルク分子生物学研究センター等

—The World of Learning 1990 より—



ハイデルベルク大学図書館

平成2年度日本語・日本文化
研修留学生の受け入れ

昭和57年度から、本学では「日本語・日本文化研修留学生制度」（広報No.240参照）による留学生を受け入れているが、平成2年度は、6か国から14名を受け入れることとなり、10月15日（月）京大会館において西島安則総長はじめ関係教職員の出席のもとに開講式が行われた。

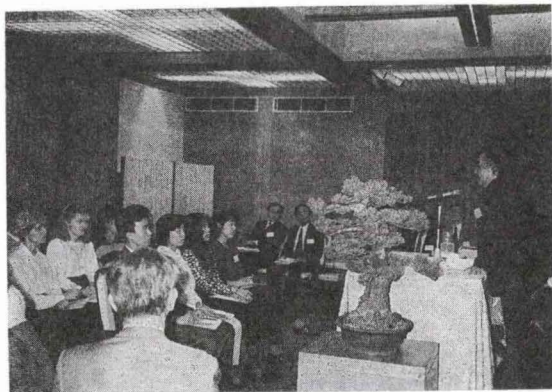
また、平成元年度の留学生13名に対する修了式が、9月12日（水）国際交流会館（芝蘭会館）において開催され、修了証書が授与された。

本年度の研修の概要は、次のとおりである。

日本語・日本文化に関する授業計画と授業時間数

	授 業 科 目	授 業 時 間 数		
		第一期 (10~3月)	第二期 (4~9月)	計
〔Ⅰ〕 日 本 語	① 読解・口頭表現	時間 30	時間 30	時間 60
	② 日本語講読	30	30	60
	③ 文章表現	30	30	60
	小 計	90	90	180
	〔Ⅱ〕 日 本 事 情	① 日本事情 (A)	32	26
	ア) 日本の社会に関する概説	(10)		(10)
	イ) 日本の法政に関する概説	(12)		(12)
	ウ) 日本の経済に関する概説	(10)		(10)
	エ) 各分野の諸問題		(26)	(26)
	② 日本事情 (B)	50	42	92
	ア) 日本文学	(20)	(22)	(42)
	イ) 日本文化・歴史(風土を含む)	(30)	(20)	(50)
	小 計	82	68	150
〔Ⅲ〕 特 別 教 育	① 現代産業及び現代文化に関する参観・研修等	60		60
	② 伝統産業及び伝統文化に関する見学等		60	60
	③ 特別講義		30	30
	小 計	60	90	150
	日本語強化コース	240	80	320
合 計		時間 472	時間 328	時間 800

(外国人留学生日本語・)
日本文化研修実施委員会)



平成2年度日本語・日本文化研修留学生開講式

自衛消防団が京都市自衛消防隊 訓練大会に左京区代表として出場

本学自衛消防団（団長 松本道雄 庶務部長以下団員28名）は、10月11日（木）京都市消防学校で開催された第15回京都市自衛消防隊訓練大会において、訓練種目「屋外消火栓操法」に左京区代表として出場し、日ごろの訓練成果を披露した。

なお、本大会は、消防技術の向上のため毎年開催されているもので、この日は各行政区から選抜された50事業所の自衛消防隊が参加した。



<紹介>

60周年をむかえた人文科学研究所 と英語呼称の改正

京都大学の一部局として人文科学研究所が発足したのは、東方文化研究所、人文科学研究所、西洋文化研究所の三研究所が統合した1949年。そのうち東方文化研究所の前身、東方文化学院京都研究所が創設されたのは1929年であるから、昨年度はその60周年であり、今年度をもって61歳となった。（『京大広報』No.141 参照）重病もせずに年輪を刻んだからには何らかの記念行事をと言うことになるが、日本人の平均寿命も伸びて、還暦の祝をするひともまれになったことでもあり、また50周年には盛大に記念行事を催したこともあり、60周年としては特別に行事をおこなうことはしなかった。当研究所では10年ごとのくぎりには必ず研究者全員が『東方學報』『人文學報』、そして“欧文人文”の慣称をもつ欧文誌 *Zinbun*、これらの紀要のいずれかに論文を発表しなければならないことになっている。この慣習は今回もまもられた。その意味では普通の10年目の区切りであったというほかない。

ただ、60周年を迎えたこの何年かは、所員に欧米で Ph. D. を取得した研究者も増え、欧米に長期短期を問わず研究滞在することも急増し、一方外国人客員部門が認められてからは所員会メンバー（他部局の教授会に相当。人文研では助手の代表も含む所員会）に欧米の研究者が常席することが普通になってきた。また特に最近欧米においては、当研究所とは関わりが比較的薄く、また日本語も解さないという人々を対象に含む学術出版物において、当研究所の研究活動や研究者が紹介される機会も増えている。このような状況のなかで、当研究所の英語呼称 Research Institute for Humanistic Studies が話題にのぼるようになってきた。この呼称はあくまでも公称「人文科学研究所」に対する直訳名である。そのためか、ほとんど日本国内の研究所の英語名にしかみられない、語頭に Research Institute をつけるという奇妙さがあり、さらに research と studies とがだぶってしまっている。しかし、もっとも問題となるのは、Humanistic Studies で、これがいる

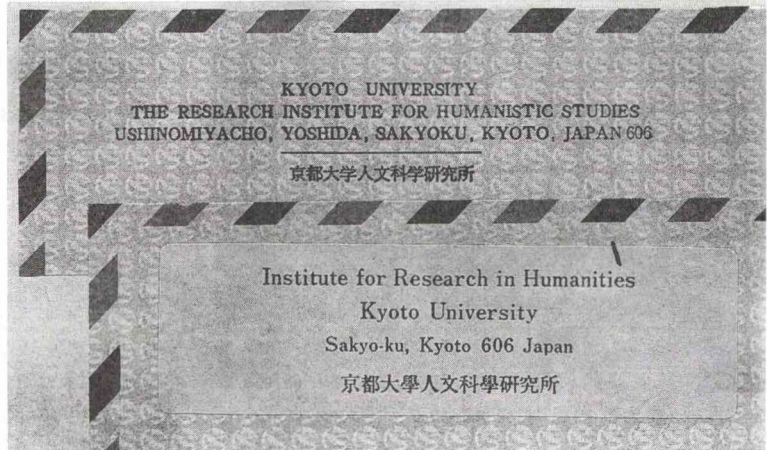
いろと誤解をうむ語である。

“humanism”, “humanist”, “humanistic” の語は、今世紀はじめころから誤解や迷いをうみやすいものとして問題視されてきたことはたしかである。次のようなかなり異なる意味を伝えるという特性を持つからである。(1)ルネサンス時代の、ギリシャ＝ローマの古典詩文、哲学、歴史の文献研究を據りどころとする人文主義、その信奉者、その形容詞形、(2)懐疑主義、とく

に神の存在に関する不可知論、教会神学から自由な思考、(3)オーギュスト＝コントの実証主義的「人類教」、(4)人道主義、人権至上主義、あるいは国によってはマルクス主義をもさすことになる。学界で当研究所の実情を知らない人は、(1)を想い、あるいは、と考へて、ほんとうにそんなことをやっている所かと聞き返されることが多いし、学界外では、まず(4)を想い、次いで(1)か(2)かもしれないと、迷い始める始末である。

英語はいまや学術上の共通語としてばかりでなく、国際語として使用される状況である。現行の英語呼称が、研究所設立の趣旨や過去の実績や当面の活動実態、あるいは日本の学術機構中に占める位置とかなり異なる意味を伝えてしまうと、当研究所としてもはなはだ迷惑であるし、いちいち説明するのも煩わしい。現行呼称がより広範囲に各国で定着してしまう前に改めておこう、当研究所の60周年はその好機である。

そのために特別に委員会を設けて、数回の検討会を開いた。Research Institute は使用しない。Institute は、科学研究や教育、そのほか公の目的の推進のための機関や協会であり、for 以下に研究内容が表されている場合には、Research は不要である。しかし当研究所は教育より研究に重点があり、学生をもたないのであるから、Research を加える必要がある。人文学は the Humanities であるが、そうすると上記(1)と同じ意味になる。人間社会や個人を対象とする研究で、古典の教養を必ずしも基礎におかない諸学も分化発達している現状を考慮し、定冠詞をはずす。かくして当研究



人文科学研究所の航空便用封筒のキャプション 新(下)、旧(上)

所は Institute for Research in Humanities を正式な英語呼称とすることに所員会の議決を経て決定した。これにともなって、“欧文人文”の正式名称も *Zinbun: Memoirs of the Research Institute for Humanistic Studies* を改め、*Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities* とし、従来不定期であった *Zinbun* を年刊として、公刊していくことになった。

(人文科学研究所)

<資料>

人事院勧告の取り扱いに関する 国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会会長から、人事院勧告の取り扱いに関し、以下のとおり文部大臣、大蔵大臣及び総務庁長官宛に要望書を提出し、その趣旨に則り配慮方を要望した旨報告があった。

平成2年10月8日

国立大学協会会長
有馬朗人

人事院勧告の取り扱いに関する要望書

人事院による国家公務員の給与勧告が、労働基本権制約の代償措置として、また国家公務員の給

与水準を適正に維持する制度として定着し、公務の能率的運営と公務員労使関係の健全性の実現に大きく寄与していることは周知の事実であります。

この数年間は、関係者の努力により、勧告どおり給与の改定が行われ、これにより各大学においても職員の勤務意欲の向上や、労使の信頼関係の保持等の点で好ましい影響をもたらされており、今年度の勧告の完全実施に対する期待には更に大きなものがあります。

もとより、当国立大学協会は、国の財政が極めて厳しい状況におかれていることも十分に承知しているところであり、各大学においては、過去数次にわたる定員削減及び行政経費の節減・抑制に

ついても不断的努力を重ねております。

現在、国立大学においては、21世紀を目指す教育改革の一環として、高等教育及び学術研究の高度化の積極的推進が重要課題とされており、またこれが国民的期待でもあると考えます。これらの課題への積極的な取り組みを期待するためにも、大学教職員の適切な処遇を確保することが必要であり、このことがひいては優秀な人材を確保し、将来にわたる我国の高等教育及び学術研究の進展に寄与するものと確信いたします。

上記の理由により、国立大学協会は、本年度においても昨年と同様に人事院勧告が、完全に実施されることを強く要望する次第であります。

附属図書館 平成2年度秋季展示会

「和漢書古典籍のさまざま」の開催

第一部 重要文化財指定図書

第二部 名家伝承本

本館では開館以来、所蔵資料の紹介を兼ねて、しばしば各種の展示会を開催しております。今回は「和漢書古典籍のさまざま」と題して、附属図書館所蔵資料の中から、第一部として重要文化財指定図書を、第二部として名家伝承本を中心とした貴重書を展示いたします。学術研究上貴重なこれらの資料は、文化財保護の見地からも、その保存並びに取扱いに格別の配慮が必要であるため、平素は研究の用に供する時のほかは、恒温恒湿の貴重書庫に収納し、大切に保存しています。このたびは「教育・文化週間」の趣旨に従い、重要文化財に対する理解と関心を深めていただくため、それらを学内・学外に広く公開することにしました。それと同時に、第二部では名家伝承本を主として展示して、奈良時代から江戸時代にかけての、和漢古典籍の様々な形態（書誌学的）もあわせて鑑賞していただけるように配置いたしました。これを機会に古典籍への関心をより一層お待ちいただければと考えております。

記

期 間： 平成2年11月27日（火）～12月7日（金）
（日曜日・月末休館日（11/30）を除く）
時 間： 午前9時30分～午後4時30分
会 場： 京都大学附属図書館展示ホール（3F）
（備 考） 入場無料

（附属図書館）

